

住民参加型集落計画の理念と方法

— 遠野市Y集落を事例に —

浅井 悟

(東北農業試験場)

Idea and Method of Community Planning by Participation of Residents

— Instance of a community in Tono City, Iwate prefect. —

Satoru ASAI

(Tohoku National Agricultural Experiment Station)

1 はじめに

今日、一定地域を単位とした生産、生活の再編による地域の活性化が農村地域の主要課題のひとつとなっている。こうした再編を中長期的な展望をもって進めるためには、総合的な農村地域計画が必要となるが、こうした計画は、行政主導の上からの（トップダウン型の）計画ではなく、地域住民の意思に基づいた下からの（ボトムアップ型の）計画である必要がある。これが現在、参加型の農村地域計画が求められている背景であり、その下からの計画単位として、集落が注目されている。

本報告では、住民が集落内の多様な利害・意識を調整し、集落全体で目指すべき目標を設定する集団的意思決定の過程に着目し、その意思決定過程を科学的に支援していくための基本的な考え方と具体的な方法について、適用例を紹介しながら明らかにする。

2 方法

ここでは、住民の集団的意思決定を支援する方法として、住民の多様な目標を一連の操作的な目標体系に集約する方法を取り上げる。この目標体系は、複数の目標が階層的に構造化され重みづけされた体系であり、集落計画に関する住民の基本理念、価値判断を表すものである（図1）。このように集落の諸目標を体系化することで、諸目標間の関係及び個々の目標の重要性の把握が容易になるという利点がある。この目標体系構築のプロセスは以下のとおりである。

①目標の抽出と整理

目標体系構築への参加メンバー（集落の一定年齢以上の

住民全員であることが望ましい）が、個々の主観に基づいて集落が目指すべき目標をランダムに挙げる。挙げられた複数の目標は全体で集計し絞り込みを行う。具体的手法としては、デルファイ法やKJ法などがある。

②目標体系の構造化

整理された複数の目標を、目標相互間の関係に基づいて階層構造に体系化する。ここでは、階層が上位の項目ほど抽象的・包括的な目標であり、下位の目標ほど具体的・個別的な目標である。ここで個々の目標とその上位目標との間には、下位目標の達成が上位目標の達成に貢献するという関係が仮定されている。この階層構造体系は個々の住民の主観によって異なることが予想されるため、それらをまとめてひとつの体系に集約化する。具体的な手法としては、ISM法やDEMATEL法などがある。

③目標の重みづけ

次に、体系の各階層ごとに、階層内の諸目標の重要性に関する住民の評価を明らかにする。この評価は集計の都合上定量的に行うことが望ましい。得られた住民個々の評価は全体で集計し、その結果に基づいて個々の目標に重要性の重みづけを行う。

①・②・③のプロセスの各段階においては、住民の判断材料となる情報が適切に提示されることが必要である。また、このプロセスは一過性のものではなく、結果が住民に戻されつつ繰り返されることが望ましい（図2）。

3 方法の実証

この集落計画目標体系構築プロセスの実証を、遠野市Y集落を事例に行った。Y集落は、遠野市のほぼ中央部の中

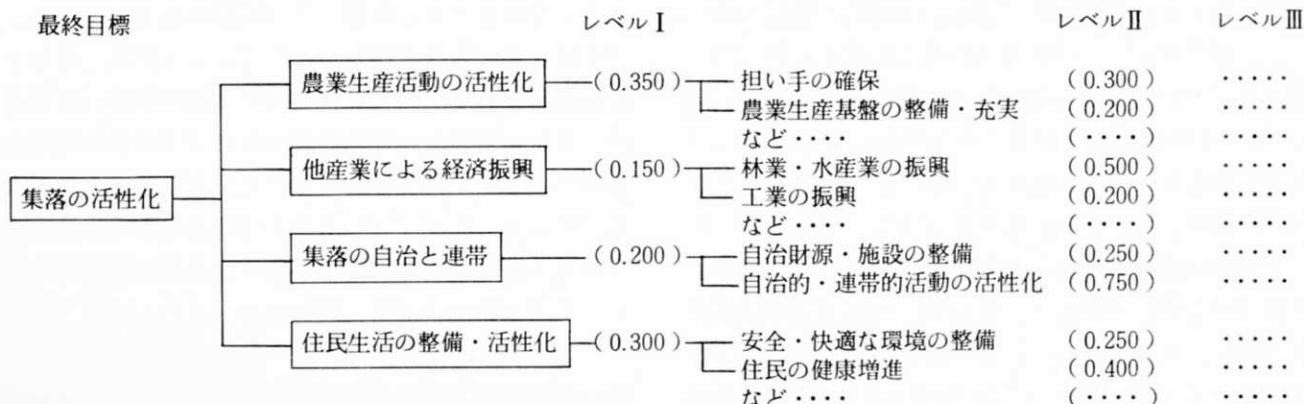


図1 集落計画目標体系の階層構造の概略（括弧内の数字はウエイトの例）



図2 集落計画目標体系構築プロセス

山間地帯に位置する世帯数20戸の集落である。うち農家数は18戸で、専業農家はおらず、その多くが女子労働力を中心に、水稻、タバコ、繁殖牛の複合経営を行っている。今回の調査対象者はY集落在住の20歳以上の住民で、実査は1989年の3月と6月（補充調査）に行った。最終的な回答者数は46名である。

今回の調査では、時間の制約からプロセスの①・②については事前に調査者の側で行い、集落の計画目標体系を仮想的に設定した（図1）。そしてプロセスの③について、目標の重要性に関する住民の価値判断を探るというかたちで方法論の部分的実証を行った。

ここでは、個々の住民の価値判断構造を定量的に評価する手法として階層構造分析（AHP）を用いた。図1のレベルIを例にとると、「集落の活性化」という最上位目標

に対して四つの下位目標が設定されているが、この四つの下位目標のそれぞれが上位目標（集落の活性化）の達成のためにどのくらい重要であるか、その重要性の程度が問題となる。AHPを用いることにより、その重要性の程度に関する個々の住民の価値判断を具体的なウエイトとして算出することができ、これがAHPを採用することの大きなメリットである。

ウエイト算出の手続きは、まず、全体の評価項目のなかから項目の組合せを二つずつ選択して、それらを比較した場合の相対的重要性に関する価値判断を回答者に尋ねる（一対比較）。この一対比較による価値判断結果には特定のスケール値（表1）を与え、すべての組合せについて一

表1 一対比較の際の「1-9」スケール値

	A	B
Aの方が絶対に重要	9	1/9
Aの方がかなり重要	7	1/7
Aの方が重要	5	1/5
Aの方がやや重要	3	1/3
AとBの重要性はほぼ同じ	1	1
Bの方がやや重要	1/3	3
Bの方が重要	1/5	5
Bの方がかなり重要	1/7	7
Bの方が絶対に重要	1/9	9

対比較を行った後、スケール値に基づいて、項目の重要性判断に関する一対比較行列を作成する。これらの一対比較行列に基づいて、各項目の重要性ウエイトの推定値を算出する（表2）。この重要性ウエイトは回答者個人の価値判

表2 重要性評価の一対比較行列とウエイト推定結果の例

	A	B	C	D
A	1	7	3	5
B	1/7	1	1/5	1/3
C	1/3	5	1	3
D	1/5	3	1/3	1

A: 農業生産活動の活性化 B: 他産業による経済振興
C: 集落の自治と連帯 D: 住民生活の整備・活性化

項 目	ウエイト値
A: 農業生産活動の活性化	0.565
B: 他産業による経済振興	0.055
C: 集落の自治と連帯	0.262
D: 住民生活の整備・活性化	0.118

断構造を表わすもので、数字が大きいほどその項目（目標）の重要性が大きいと回答者が判断していることを示す。ただしAHPの理論上、一対比較判断の回答の整合性が低いと、ウエイト推定の精度が低くなるため、今回の調査では回答の整合性の点からデータをチェックし、一定以上の整合性をもつデータのみを採用した。

個人ごとの分析データを集落全体で集計し平均を求めることで、個々の目標の重要性に関する集落の平均的な価値判断構造を把握した。また、回答者の各属性別にデータを集計し、各属性と個人の価値判断との関連を分析した。

4 分析結果の要約

今回の調査結果から、集落計画目標体系に関するY集落住民の価値判断構造には以下の特徴及び傾向があることが指摘できる。

目標の重要性ウエイトのパターンは、特に続き柄によって異なる。その場合、男女の性差も見られたが、それよりも経営主世代と後継者世代の違いによる差異の方が大きく現れた。今後の集団的意思決定場面では、こうした世代間の意識・利害の調整がポイントとなると思われる。

また、今回は時間等の制約から計画目標の階層構造体系の設定（プロセスの①・②）に関しては、調査者の側で仮想的に行ったが、本来は、集落の抱える問題や課題について、住民の意識を探るなかから、目標体系を設定する必要がある。

5 今後の課題

この計画目標体系構築プロセスは一過性のものではなく、結果が住民に戻されつつ繰り返されることが望ましい。その意味で、プロセスの結果である重みづけされた計画目標体系そのものは絶対的なものではなく、むしろこのプロセスの最大の意義は、住民がプロセスの各段階に主体的に参画することで、日常的には明確に整理していなかった集落問題についての理解・学習を深めるという点にある。つまり計画目標体系構築プロセス自体に学習過程としての意味があるということである。今後、研究サイドとしては、住民の理念、価値判断を反映したより実践的な目標体系構築手法を開発するとともに、目標体系に関する集落住民の意識構造及びその変容過程を把握することが、課題となると思われる。